



# 前進座公演

山本周五郎 原作

田島栄 脚色

十島英明 演出

# 柳 橋 物語

「待っているわ」そのひと言が

おせんの一生涯をさめた

生きることのきびしさと

愛することのかなしさと

江戸・下町を舞台に

ひたむきに生きる若者たちを

情緒ゆたかに謳いあげる

山本周五郎の

珠玉の作品

待望の再演!!

装 置 佐藤琢人  
 照 明 寺田義雄  
 音 楽 越田知子  
 効 果 田村 恵  
 演出 小野文隆  
 助手 隆

【日時】4月14日(金)18:30 開演

【会場】呉市文化ホール

入会のお申し込みは

後援/呉市

入会金(1,000円)+2ヶ月分会費を添えて呉市民劇場事務局までお申し込みください。

■会費(月額) 一般 2,400円 学生 1,300円 高校生以下 1,000円

呉市民劇場事務局 (呉市本通2-5-1グローバル本通103号) TEL 0823-22-4516





庄吉  
中嶋宏太郎



幸太  
嵐芳三郎



おもん  
浜名実貴



おせん  
今村文美



渡会元之



早瀬栄之丞



黒河内雅子



北澤知奈美



横澤寛美



西川かずこ



藤川矢之輔



田中世津子



津田恵一



和田優樹



嵐市太郎



玉浦有之祐



忠村臣弥



上滝啓太郎

### 前進座 山本周五郎上演記録

(初演年)

- 1962年 こんち午の日
- 1964年 季節のない街
- 1968年 ながい坂
- 1970年 雨あがる
- 1975年 さぶ
- 1977年 扇野
- 1977年 柳橋物語
- 1978年 あすなろう
- 1980年 梅咲きぬ
- 1981年 夜の辛夷
- 1985年 つゆのひぬま
- 1987年 赤ひげ
- 1989年 わたくしです物語
- 1990年 青べか物語
- 1992年 深川安楽亭
- 1996年 かあちゃん
- 1997年 地蔵～イカサマ地蔵騒動譚
- 2012年 おたふく物語

〈あらすじ〉  
江戸茅町にある杉田屋の職人・幸太と庄吉は、どちらも腕も良  
く人柄もいい。研ぎ職人の源六の孫娘・おせんは、どちらにも近  
しさと親しさをもっていた。  
だが、杉田屋の跡取りは幸太に決まり、失意の庄吉は上方へ修  
行に旅立つ。別れ際、「二人前になって帰るまで待っていてくれ」  
と、おせんに言い、「待っているわ：庄さん」と、答えたそのひ  
と言が、おせんのそれからの一生をきめてしまった。  
その後、杉田屋からおせんを幸太の嫁にほしいと言ってきたが、  
祖父の源六は断ってしまう。貧乏人の意地からであった。  
間もなく源六が卒中で倒れ、江戸は大火事に見舞われる。この  
時、かけつけた幸太は源六とおせんを助けようと力の限りたか  
いながら死んでしまった。「おせんちゃん、生きるんだぜ、諦め  
ちゃあいけない」と叫んで――。  
ひとり残され、一切の記憶を失ったおせんは、飢えながらさま  
い歩く―― 火事のなかで拾った赤ん坊をしつかり抱いて――。

庶民の生きるための苦しみも悲しみも、  
喜びも楽しさも、すべてがここにある  
苛酷な運命と愛の悲劇に耐えて、人間の真実を貫き、愛をまっとう  
した江戸庶民の恋と人情を描いた山本周五郎の名作が今、よみがえり  
ます。

# 柳橋物語

題字 朱海慶

感想文(前回の公演より)

◇感動しました。  
愛をつらぬくむつかしさ、け  
なげなさに胸をうたれました。  
人のうわさが与える影響の大き  
さを改めて認識し、自分も知ら  
ず知らずに人を傷つけていない  
か、気をつけなくてはと思われ  
ました。

◇真実の愛とは何か。また、そ  
れを見極める事の難しさを考え  
させられた。

江戸の大火の時、武家屋敷の  
門が閉ざされ逃げ場を失った庶  
民が次々と焼死していく。いつ  
の世も、庶民は権力者の犠牲に  
なっていると思うと腹がたつた。  
しかしながら、焼け跡の中か  
らたくましく立ち上り、生活を  
していく民衆や、時には陽気に  
時にはいじわるしながら、しか  
し団結していく長屋の人々に、  
底力や明るさが感じられた。

◇本で読んだ柳橋物語は、お芝  
居としてどのように表現される  
のか、初めはその程度の見方し  
か出来なかった。しかし、ただ  
良かった、涙が出ただけでは済  
まされない何かが残った。  
一番分かって欲しい人、心を  
知って欲しい人に聞いてもらえ  
ない苛立たしさを、悔しさがどん  
なに残念で辛かったらうと思う  
時、おせんが哀れでならなかった。  
感情的になっていく時にこそ  
感情のままに言葉を出してはい  
けない、心を鎮め話を聞く態度  
が必要ではないか、傷ついたお  
せんが他人の目より自分自身を  
信じた時、強くなれたと思った。